

## ベネディクト戒律が啓いたキリスト教文明



浅野忠利

## ●ベネディクト戒律の栄光

20世紀の二人のローマ教皇がヌルシアのベネディクトゥスを賞賛した。教皇パウロ6世は1964年の回勅（全信徒への書簡）で「キリスト教文明の光で、かつて暗闇を排斥し、平和の賜を輝かせた彼は、今も尚ヨーロッパに君臨し、彼のとりつぎによって文化は発達し、ますます拡大して行く。」と讃えた。（朝倉文一氏訳）

ヌルシアのベネディクトゥスは紀元480年イタリアのペルーシアの近郊ヌルシアに生まれ、同じく547年自ら創設したモンテ・カッシーノ修道院で没した。彼はローマ帝国滅亡後の荒廃と混乱の中で修道院を建設し、修道士達を生み出す仕組みを整えた。この仕組みの源が「ベネディクト戒律」である。「ベネディクト戒律」の最大の特徴は、従来修道の主流であった、個人を重んじる隠修士を排除して共住修道士による10～12名の小集団を修道院の基本としたことにある。この小集団において、共住修道士は、キリスト教信仰の原点に戻り、禁欲を貫き、聖書に記された神のみ言葉に従う事によって、この世に必要なものを創り出す知恵と力を有する、現在で言えば「万能のプロジェクトマネージャー」に育っていったのである。今ひとつ特筆すべきは、巨大な権力を背景とする隷属的労働力をキリスト教徒の務めとしての自発的肉体労働に置き換えたことである。この修道院という小集団の構成員である共住修道士が、平等に、合理的に分け合うことによって自発的労働を完璧に実行したのである。

## ●ベネディクト戒律における修道院の生活像

「ベネディクト戒律」は修道院が成立するために必要な修道院長と共住する修道士の護るべき規則である。この短い規則集は、修道院長のためと修道士のための二つの戒律を重ね合わせて出来上がったものとされている。言語は標準語を用いず、簡素なラテン俗語によりかかっている。内容において厳格・寛容・素朴であり、表現において簡素・明快である。

「ベネディクト戒律」においては、祈りと労働が何よりも尊重されている。祈りつつ働くことにより、その働きは神の愛と栄光を表すものとなる。神を賛美しつつ、創造的自由な働き場を見だし、開拓・農業、学問・教育、神学・福音宣教、典礼・音楽、教会芸術等のために祈りつつ働いた。祈ることは絶えず求められた。集団の務めとしての祈りは、早朝午前一時過ぎから夕暮れまで2時間毎に告げられる鐘の音によって、修道院教会に集まり、1日3時間半

から4時間の祈りを捧げた。集団の祈りに加え、個人の祈りも求められた。まさに祈りつつ働く。祈りに中断されつつも、1日6時間から8時間の修道院区域内での労働に勤めた。その結果として、着実な成果は、中世を経て、現代に至るまで引き継がれ、社会インフラの整備に始まり、古典の保存研究に至るまで農業、建築、教育、哲学、薬学、芸術等広い分野で、大きな花を咲かせることとなった。

修道院生活の細部に至るまで規則は定められており、睡眠について冬至は就寝午後4時・起床午前1時20分約8時間の睡眠、夏至では就寝午後8時・起床午前1時45分約5時間の睡眠で、昼寝で補っていた。いずれの場合も10人ないし20人が全員同じ場所で寝ることが原則であった。食事は夏期は1日2回、冬期1日1回で、分量は2品とした。器具や物品の私有はいっさい赦されず、私有物の所有は重く罰せられた。使用出来るものはフード付きマント・長い外衣・前垂れ・サンダル・靴・ベルト・小刀・ペン・針・手拭き・筆記版に限られていた。修道院生活の基礎となる時間の設定は、常に日の出から日没、日没から日の出をそれぞれ12等分しているために、冬至と夏至では全く様相を異にする。例えば冬至の昼間の一時間は45分、夜間の一時間は75分、夏至ではこの逆となり、復活祭（3月か4月）から11月と11月から復活祭までとは、日課を変えている。

## ●現代への伝達

ベネディクト戒律の第57章に熟練した技能を有する者の驕りについて触れている。「修道院において仕事に従事するものは、修道院長の許可を受けて、あくまで謙虚な心で仕事に従事しなければならない。もし自分はこの手仕事によって修道院に役立っていると考えられるのであれば、このものはただちに仕事を止めさせなければならない。そしてこの者は、謙虚の心を示し、修道院長から再度許可を受けた後において、はじめてこの仕事を続けることができる。」

これはキリスト教社会におけるものづくりの原点である。自らを神に捧げることにより得られた自由によって「もの創り」は発展するのである。もの創りに携わる者は自由に命をかける。この共同体への奉仕の精神は、シトー派の修道院を通して、中世の同業組合（手工業ギルド）に受け継がれて行く。やがて宗教改革、20世紀のデザイン運動、そして何よりも資本主義になだれ込んで行く。

今回は修道院に訪ね入る。